

「島木赤彦」命名考

伊藤 俊彦

明治以降文芸に携わる者を一口に文学者と呼び慣わしているが、彼らの署名には時代の反映が見られる。大別すれば文人墨客の流れを汲む存在と見做して雅号を用いた時代と西洋に倣って本名または筆名（ペン・ネーム）を用いた時代に分かれる。紅葉、露伴、漱石、藤村といった明治からの文学者は雅号をもって署名とした。花袋や秋声など自然主義の作家も号を用いた。本名を用いたのは鈴木三重吉、野上弥生子、小内山薫らが明治四十年頃散見し、谷崎潤一郎が明治末年に登場、大正前期を代表する白樺派から一般化している。筆名も白樺派の里見弴あたりが走りであろうか。

歌人の場合も同様で鉄幹、子規、啄木、白秋、牧水等いずれも雅号である。本名を用いているが落合直文（萩之舎）、佐佐木信綱（竹柏園）、会津八一（秋艸道人）など別号を用いる場合もあった。斎藤茂吉も童馬山房主人と名乗ることがあった。

純粹に本名を用いているのは「明星」の女流の一部や長塚節らが古く、それに次いで吉井勇や川田順などが居り、「アララギ」派では中村憲吉や土屋文明がいる。

筆名を用いた歌人は伊藤左千夫や岡麓が走りであり、赤彦や古泉千樫などがこの派に属している。

○ 赤彦も時代を反映した幾つかの雅号を経ながら島木赤彦という筆名に至り、死ぬまで変えることがなかった。赤彦の文学的出発は明治二十四年、数え齡十六歳の頃郷党の友人らと俳句を作り始めたことから、骨笑という俳

諧独特の剽げた号を用いていた。翌年から意識的に作詩、作歌を始め、父浅茅から旧派の和歌の手解きを受けている。二十六年になると諸雑誌に投稿するようになり、伏竜、伏竜樵夫の号を用いた。地に潜みながら他日を期す気概を込めたネーミングである。長野師範入学後は更に投稿熱が加わったが、二水、二水軒、山百合を用いるようになった。二水は郷里下古田を流れる柳川と上場沢川の間居があることからの発想であり、山百合は深山に咲く百合の凛とした気品と清純さに己れの理想を託している。三十三年池田から玉川小に移り、岩本木外らと宿直の弥牟庵で文芸、教育を論じた頃から山百合を多用した。三十七年には柿村舎、柿村を、三十八年からは柿人、柿の（乃）村人を用いている。柿は本字の柿を用いているが、これは高木の養子先の屋敷に柿の木があり、また高木の聚落も柿の木が多かったことに因っている。後の柿蔭山房なる命名もこれと同じ発案である。柿の村人は正岡子規の竹の里人に倣ったもので、根岸短歌会ではポピュラーなネーミングであり、芋の花人、古沢芋人、田川の里人など類似のものが多かった。左千夫に親炙し、根岸短歌会になじむにつれ、生前会うことの無かった鼻祖たる子規への尊敬の念が増したことになる命名であろうか。或いは左千夫の垂流でなく原点に遡ろうとする意の表れであったのかもしれない。

○ 島木赤彦と改名したのは大正二年の「アララギ」七月号からである。中原静子あての書簡に（これ迄千樫編集で遅刊、休刊がちであったが）七月号は茂吉の編集だから七月一日に発行できるだろうとあり、そうだとすれば原稿は五月末には書かれていたと推測され、その時点で新ネームの署名があったものと思われる。編輯所便で茂吉は「柿の村人は『馬鈴薯の花』を限界として島木赤彦となりました。」と記している。

従って新ネームは「馬鈴薯の花」が計画された頃から赤彦の胸中に発意されはじめたと思われる。大正元年十月二十二日の書簡に「冬中に我々の詩集を出す話をしてゐる」とあり、三十日には「十二月に斎藤、中村、古泉、柿人の四人の歌集を出版する」とあり、年末には歌集名は赤彦の推す「馬鈴薯の花」に決定した。しかし茂吉と千櫨の原稿が纏まらず、逡巡する憲吉の臂をたたいて赤彦、憲吉二人の合同歌集とすることにした。十二月二十四日の書簡には「二十九日から役所休み、そうなれば『馬鈴薯の花』の原稿も書けます」とあり、具体的な作業が進捗し始めている。しかし長塚節の「土」を出版した関係で期待した春陽堂に出版を断わられ、赤彦、憲吉夫々五十円納める自費出版として東雲堂から出ることが決まったのが五月下旬であり、六月中には上梓されると思われたが、実際出来上ったのは七月十一日であった。以上の経過からすれば大正二年五月には新ネームの島木赤彦は確定していたと考えられる。

しかし、島木赤彦は一気に大正二年五月頃作られたのではなく、かなり早くから名前にあたる赤彦は生まれており、姓の島木は大正二年五月頃作られたものと推測される。

川井（中原）静子の『桔梗ヶ原の赤彦』に「赤彦の名」と題する一文があり、次のような記述がある。

明治四十三年二月十一日の紀元節の夜、校長の赤彦と同宿していた広丘小学校の新任教師の中原静子は赤彦の部屋で紀元節の行事の四方山話の後、赤彦が中原の名前の手本を書いてあげようと筆の運びなど注意点を述べながら中原志づ古と書き「並べて柿の村人と書かれた。この名前もいやになつたと消しておしまいになり——中略——それから紅と赤の二字を並べて書き——

——中略——赤という字の下に彦という字を書かれた。『赤彦か、赤彦はどうだい。いい名じゃあねえかい。俺も気に入っているがなあ。しかし赤という字は考えものか。』——中略——続いて赤、一点、九月と一気に書かれた。」

この後中原静子へ「赤の一点がしみつきました」と愛の告白をする場面が続いている。この時赤彦にとって赤は情熱であり、恋のイメージと捉えられていた。世俗に疲れた三十男に若い血を蘇えらせ、恋の思いを募らせ、新しい世界に導く色と考えられたのである。しかしそれを世間に向かつて発表するだけの決心までは育たず、赤の華やかさに途惑う気持ちが強かったことも伺われる。若かえろう新しい自分として再出発しようと心に期しながら、身体に移す強さまでには至らなかった。しかし赤のイメージに見出した新生への発芽は赤彦の胸中に徐々に醸成されていくのである。

「彦」は本人の俊彦の外次兄秀彦、三兄武彦、長男もまた政彦と名付けたように赤彦にとつて最も馴染があり、執し愛すべきこだわりの字であった。長男政彦の政は養子先の久保田家伝来の字であり、それに彦を付けたところが赤彦の「彦」への執着振りが伺われる。

その後改名への具体的な動きはなく、柿の村人に終始していたが、「赤」へのイメージは新しいものが付け加わった。

前出の『桔梗ヶ原の赤彦』では「中原は白桃の花といった感じがする。——

——中略——中原ははかなくて影が薄い。」と赤彦の中原静子の印象を記している。中原は病弱であり、線が細く、名前通りの静かな寂しい存在であった。一年後の四十四年春、赤彦は二年間の広丘小学校校長を辞し、郷里の玉川小へ転任する。中原との別れである。この間のことを赤彦は「林の村を去る」一連六首に歌っているが第二首目に「この森の奥どこも丹の花のとはに

咲くらん森のおくどに」があり「中原なあ、二番目の歌はおめえに残したつもりだが」と言っている。

白桃の花に譬えられ、病弱ではかなげな中原静子は真つ赤な丹の花に譬えられている。中原本人の印象と相反する譬えは赤彦の中原に対する熱烈な恋心の現れであり、丹の花たる中原はその化身であつて、離れてもなお永遠の恋人であり、広丘での恋の記憶の永遠性を歌っているのである。一年前の情熱、恋、新生という抽象的なイメージから中原静子という具体的な恋人のイメージが赤に付け加えられたのであり、赤彦の赤のイメージへの執着は生き続けて行くこととなる。

齋藤茂吉は「アララギ」連載の「童馬山房夜話」の昭和十九年七月号（その後『島木赤彦』に収載）で「赤彦といふ筆名はゴオガンのタヒテイの島から暗示と感動を得たもので、赤彦の島といふのは八丈島で、その島の木は椿ぐらゐを写象したものであつた。」と述べている。赤彦の名も島木の姓も同時に作られたとの見方であり、ゴーギャンの影響下にある大正二年五月頃の発案としている。しかしすでに見て来たように赤彦の発案は明治四十三年の初めまで遡るものであり、赤に様々なイメージを加えながら醸成されていったものの大正改元を迎えてもなお新ネームとして実現することはなかった。

新ネームの機運が兆したのは「アララギ」新人層のトップを切つて『馬鈴薯の花』の発刊が具体化し、それを区切りとして新しい世界へ踏み込もうと意欲に燃えていたことの具体策として焦眉の課題となつた。それは前述したように大正元年の終りから二年の初めにかけてのことである。

これに拍車をかけたのが白樺が企画したロダンの彫刻や印象派絵画の展覧会であつた。赤彦は大正改元前後から西洋芸術、特に印象派の絵画に強く魅

かれていた。大正二年二月八日から開催される白樺の展覧会は多忙ながらも夜行で上京しようとした程の熱の入れようだったが延期となり、開催が実現して赤彦が見学したのは四月二十日であつた。その感想を「白樺展覧会は大へんよくありました。——中略——ゴーガンは南洋の島人となり土人を娶つた。二度パリへ歸つたが誰も振向くものが無かつた。ゴッホはしまいに狂人になつてしまつた。島崎さんは亡妻と子供を残して四年の旅に上つた。自分の歌など未だのんき（・・）なものである。アララギの歌は更に突き進まねばならぬ。」と強い衝撃を受けたことを中原静子に伝えている。

新しい世界へ突き進むためには旧套を脱ぎ棄てねばならず、古い殻の象徴である柿の村人から新ネームへの変更が急務となつた。白樺の展覧会はその折のことであり、ゴーギャンの赤の世界に強い感動を受けたことから長年醸成されつあつた赤彦の名前が新たな意味を加えて浮上したのである。

赤彦の赤に抱くイメージは前述の

(1) 生命、情熱、恋など新生をもたらすもの。

(2) 丹の花に譬えた恋人としての中原静子のイメージ。それは同時に自己の恋心の強さの象徴でもある。

(3) ゴーギャンの赤の世界がもたらす原始への郷愁と西洋絵画への憧憬。

赤彦は「アララギ」七月号に赤彦と署名した「消息」に「ゴーガンの『画家の母』はいい絵だね。哀れで気の毒でなつかしい画だね。切ない堪へられない時はあの絵を思い出してゐる。」と共感の情を述べている。

赤の華やかさに照れる世俗さは払拭され、赤でなければならぬ必然さを持つて赤彦の名が実現したのである。赤は単なるゴーギャンの絵からの思い付きに因るものではなく、三層からなる深い意味を蔵したもので、赤彦にとつて不可欠の色であつた。

新ネームの名前は数年来醸成されていた赤彦に決定した。では上に冠すべき島木の姓は何時かと考えると、白樺展覧会以後、七月号原執筆までの間、大正二年四月下旬から五月下旬の一ヶ月の間と推測される。

茂吉は「島はゴーガンのタヒティへのあがれから来たもの」と記しており、その通りであろう。しかし「赤彦の島といふのは八丈島で、その島の木は椿の花ぐらゐを写象したものであった。」と訳の分からぬことを続けている。八丈島は翌大正三年の秋の渡航を前提としたもので、島木赤彦改名の時点では赤彦の頭には無い存在であった。「島」はゴーギャンの絵から発想したが「木」は別のものからの発想と見なければならぬ。

赤彦の八丈島渡航が長年の憧れの結果でなく、切羽詰った突発的なものであったことを見てもよい。改名時に茂吉の言うように八丈島が想定されることが無かったことの検証である。

赤彦の八丈島渡航は大正三年教職(当時諏訪郡視学として仲々の地位)を辞し、上京して「アララギ」の編集に従事しながら下宿生活をしていた半歳後の十月二十一日から十一月十五日までの約一ヶ月間である。中原静子や金原夜汐への出発当夜のハガキには「急に八丈島へ行つて参ります。」「例の遊び癖出で」とあるように周囲も多くは知らぬ突発的なもので、準備もほとんど無く、渡航後たちまち金に窮して中村憲吉らに金策を依頼していることからも無計画さが伺われる。

八丈島渡航の実情は帰京直後長塚節に出した書簡に次のように述べられている。赤彦が「アララギ」の専任編集者を表面上の理由として出京したのは「信州を抜け出し候は全く熱病患者なりしたため」としている。なぜそうなったかの原因について大正元年十月の中村憲吉宛の書簡で「僕にも人に知れぬ苦しみがある。僕は自分で自分を棄ててしまわねばならぬ。僕の心の影は黒く暗い影法師だ。それを底へ押しこめて置いて平気な顔をしているのが悲しい。」

と深刻な告白をしている。

そうした思いは明治四十五(大正元)年になると歌にも反映し

・このごろは多く曇れりおろおろに涙流れて籠る日もあり

・ひるの土に下駄の音して入り来つる人を誰かとひそみ居るなり

・まとまらぬ疲れ心のおぼろかに法師姿が見え来るかな

・生きてあらばこのはかな身のほそぼそに髪をおろして住む日もあらん

・今はこころ分らずなりぬ煙草をば吸ひ吸ふままに口苦がくなりぬ

・酒のめばほろほろ泣きぬ今は何もあきらめてある我が膝にむきて

と現世の自己放棄に繋がるような深刻というより異常な歌を詠んでいる。この頃すでにノイローゼ状態に陥っていたのではないかと推測される。

「人知れぬ苦しみ」が奈辺より生じたものか具体的に語ってはいないが、赤彦を巡る妻不二子と恋人静子との三疎み状態が根底にあったことは確かであろう。また郡視学として人事刷新に断を振うところからくる心労や人を裁く負い目も赤彦を苦しめた因と考えられ、加えて文芸で身を立たいという昔年の思いが再び(明治四十一年の養鶏生活で一度失敗している)頭をもたげ、一種の狂躁(ヒステリー)状態に陥ったのが「熱病」ということであろう。出京後のことは「此事他人に話さず居り候ため余計に胸苦しく、八月廿二日以降は昼寝(ぬ)ね、夜起きて暮し候様な状態になり、何も手つかず持て余し候」と深刻なノイローゼ状態であったことを告白している。赤彦は従来にも「脳神経と心臓疲労のため学校欠席」(明治三十三年)とか三十九年には病臥中(八月八日)に左千夫が来て一泊し、その後十二日に「脳病先ずほとんど快復し」といった書簡中の記事があり、この時もそうした生理状態に陥っていたものと思われる。

「結果悪しと知りつつ島へ渡つてしまひ申候。何も彼も嘔み潰して忍ばねばならぬことよくよく分り居り乍ら自分でも心外と思ひ乍ら島へ行つてしまひ申候。」と自己コントロールを失った狂躁状態での突発的行動であった。

赤彦は世俗の苦しみに耐えられず、柵（しがらみ）の無いゴーギャンのタヒチへ行きたかったであろうが、それは憧憬の島であり、現実には可能な逃避場所が八丈島だったのであり、茂吉の言うように最初から八丈島が憧憬の地であったわけではない。東京より離れた島ならこの年の二月から七月にかけて北原白秋が滞在した小笠原父島なども考えられるが、八丈島より渡航は大幅に不自由であり、周到な準備が必要であつて赤彦の突発的渡航には不可能であつた。

突発的な渡航であり、一ヶ月滞在中に帰京したに過ぎないが、それは予定の行動であつた訳ではなく、十月二十三日の憲吉宛書簡の末尾に「島の学校早速には口無きが如し」とあり、長期の滞在中も視野の内にあつたことを伺わせ、ノイローゼ状態の強さが推測される。

○ 「島」はゴーギャンのタヒチへの原始回帰への共感と憧憬に因るものであつたことは茂吉の言う通りだが、「木」はどこから来たものであろうか。島のイメージを伴つた姓なら島木でなくてもよい。

島野、島居（井）、島出（手）、島田、島住などでもよく、島部（辺）というのも考えられる。赤彦の名前の由来を山部赤人への傾倒に求める説があるが、そうだとすれば島部（辺）など最適であらう。しかしこの説は後年の澄み冴えた声調を有する『太虚集』と赤人の歌調の共通に着目したもので、大正二年の改名の時点では赤彦の目指す世界は澄み冴えた世界ではなく、ゴーギャンやゴッホに魅せられた原色の赤の躍動する世界であり、赤人に倣つた赤彦という発想はあり得ないことである。

世俗の柵に縛られた現実の人久保田俊彦から新しい世界に脱け出し飛翔し得るのが新ネームに求められる要素であり、三層からなる赤のイメージから

赤彦の名が選ばれたのは前述したとおりである。「赤彦」に対応する姓もそれに相応しいものでなければならなかつた。現世の赤彦は高木（本来の居住地たる聚落（むら）の久保田（姓）の俊彦（名）である。俊彦は赤彦に置き替えられ、姓に島を付すことも決まつた。残るは高木と久保田に島以外の字を当てることである。高木の高を島に置き替えれば島木となり、久保田の久保を島に置き替えれば島田となる。赤彦の思考は島木赤彦か島田赤彦かの二者択一までに絞り込み、平凡な島田より原色の花にいろどられたタヒチの木

○

のイメージを連想させる島木が選ばれたということであらう。

○ 茂吉の前出の童馬山房夜話の一文は「シマギかシマキか」という題がついて、縁者、友人、門弟が清音、濁音夫々に発音して区別がつかず、赤彦本人も特に拘わらなかつたことを記している。右に見て来たように島木の原形が聚落の高木から来ているとすれば高木の発音の仕方に倣えば正しいということになる。高木は正式にはタカキと清音であるが婿養子として赤彦が在住していた当時からタカギと濁音発音も通用していたようである。外来者である赤彦にとつて正式呼称のタカキに拘ることなく、タカキと呼ぶ人にはそれに対応し、タカギと発音する人にはそれも是とし異をたてなかつたのであろう。従つて赤彦にとつて我が住む聚落の変形である島木はシマキでもシマギでも良かったのである。

○

以上くどくどしい推論をまとめると次のようになる。

(1) 赤彦の名は明治四十三年の時点ですでに発案されており、赤のイメージは

一様ではなく三層より成っていること。

(2) 島木の姓は居住する聚落の高木からの発想であり、大正二年四月の白樺の展覧会以降に発案されたこと。

(3) 島木赤彦の名前は新しい世界に脱け出そうとする強い期待を込めたものであったこと。

○

大正二年の改名の時点で「赤彦」に込めた思いとは別の方向に赤彦は自分の歌の世界を進め、遂には「寂寥相」「幽寂境」といった枯淡の世界に理想を見出している。しかし島木赤彦の名前を死ぬまで変えることは無かった。すでに歌壇の大家として揺るぎもせぬ大看板となったネームゆえ替えようとしなかっただけなのか、それとも何か思う処があったのか、それは筆者にとつて今後の課題である。